

2.2 実験廃液処理報告

京都大学環境科学センター 真島 敏行、中村 智恵、本田 由治、矢野 順也

2.2.1 廃液情報管理

(1) 有機廃液処理量

平成 26 年度からは全ての有機廃液は外部委託処理となり、2 年経過している。

図 1 は、過去 41 年分の年度別有機廃液処理量の棒グラフであるが、平成 27 年度の処理量は 173,313kg となり、前年度より約 11.8%にあたる 18,338kg と急増し、これまでの最高値となった。廃溶媒量は 116,977kg で前年度より 8.2%の 8,854kg 増加し、水溶性希薄廃液は 56,336kg で 20.2%にあたる 9,484kg の大幅な増加となった。(過去、廃液の計量として学内処理分は体積(L)であったが、外部処理の計量は重量(kg)表記とする。)

図 2 のように平成 27 年度の処理量の内訳として、吉田地区(工学部を除く)は 45.0%の 78,075kg であり、桂地区(吉田地区の工学部を含む)は 35.8%の 61,980kg

宇治地区(農学部を除く)の外部委託処理量は 18.8%の 32,600kg、そしてその他として、犬山地区の霊長類研究所が 448kg と大津地区の生態学研究センターの 210kg 合わせて 0.4%であった。

平成 27 年度の有機廃液処理量の部局別内訳比率を示したのが 図 3 である。工学研究科は前年度に比べ、310kg 増加し、全学の 35.8%であった。宇治地区(農学部を除く)は 684kg 増加し、全学の 18.8%を占めている。薬学研究科は前年度よりわずか 9kg の増加で全学の 10.7%であり、理学研究科は前年度より 560kg 減少し 10.5%を占めている。この外、最も顕著であったのが iPS 細胞研究所で、12,755kg 増加し前年の 0.5%から 7.8%へと急増した。

表 1 は平成 27 年度の部局別処理量を示している。

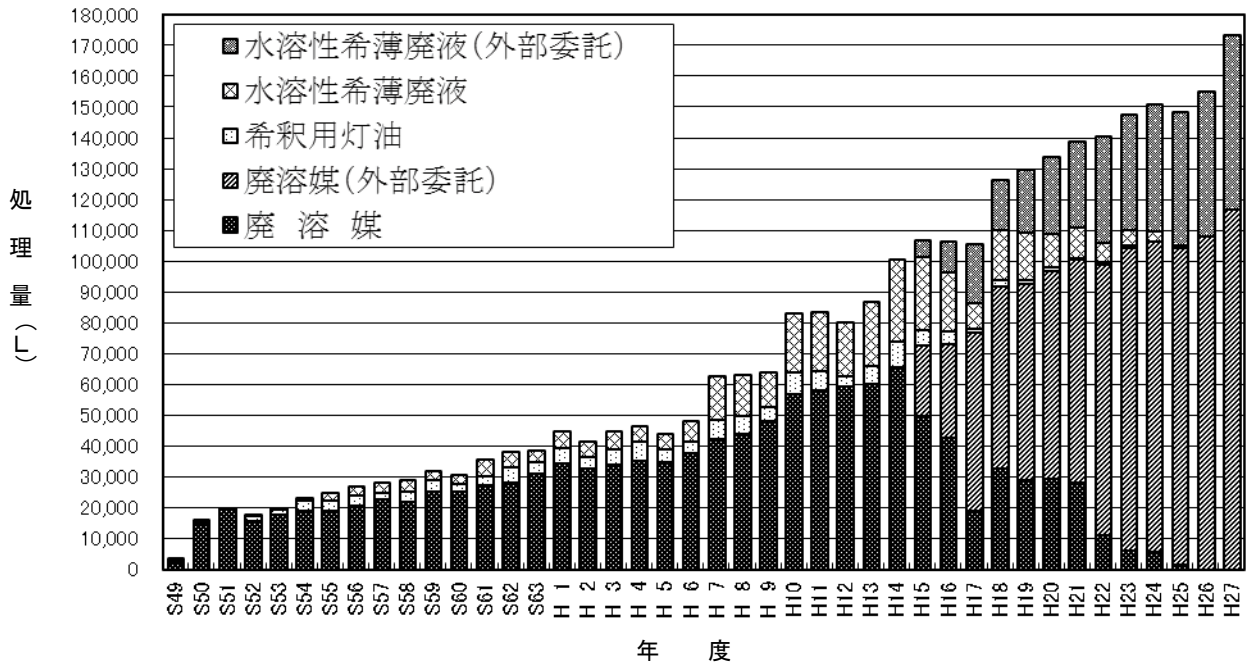


図1 有機廃液処理量（年度別）

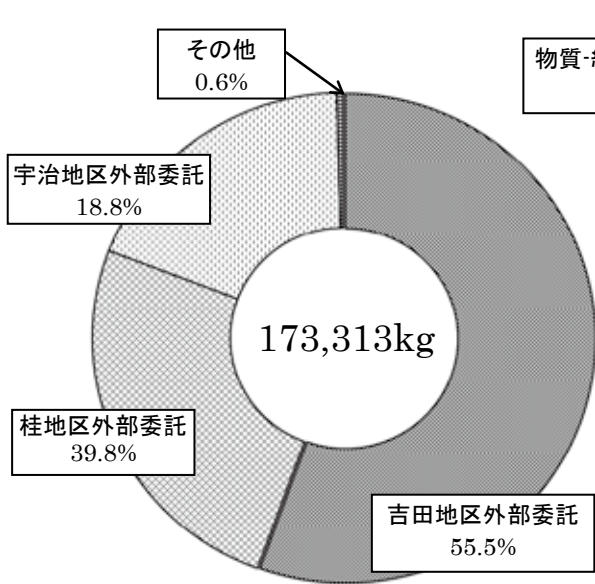


図2 平成27年度有機廃液処理量

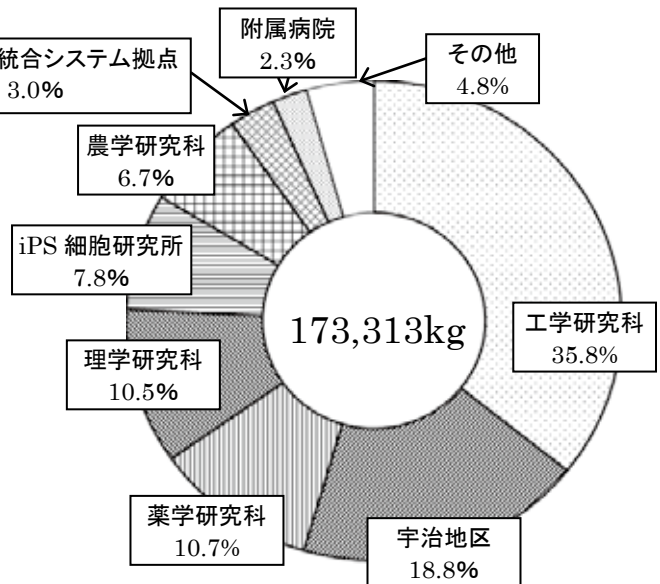


図3 平成27年度部局別有機廃液処理量